

第7回「関西建築家新人賞」審査講評

総評

関西建築家新人賞の審査に当たって、デザインポリシーをはっきりとさせて臨みたいと思った。その一つは、普通性の高まった哲学的な内容を持つもの、そしてもう一つは、建築にユーモアのセンスがあり、あまり堅苦しくないものを選びたいと考えた。

応募総数 21 点の中から現地審査に選ばれたのは、教会 2 点と住宅 3 点の計 5 点であった。個性の強い竹山、宮本両先生には、私のデザインポリシーは一切語らず審査はお任せした。この時、両先生がどれを選ばれるのが大変興味深いことであった。結果は、少し討論はあったものの 3 人とも上記 5 作品を選考した。私は不思議な思いがした。個性の強い 3 者が心底では共通する美学があったことで大変嬉しく思った。そして現地審査は設計者の意図がどこまでリアルに表現されているかの確認であった。

「西都教会」(新人賞)

外観にもし、十字架がなければその前を通り過ぎるであろう、実に普通の建築である。また、ロマネスクやゴシック風でもないのが良い。神学者、P.Tillich のことは知らないが、設計者が有限・無限の両極性を備えた「聖なる空虚」の現前を表現しようとした哲学が面白い。

ドイツの哲学者、M・ピカートの著「沈黙の世界」の中で「人間の本质は言葉であり、神の本质は沈黙である、キリストは沈黙の人であった」と記している。まさにこの空間は沈黙の空間であると思った。又、「沈黙」とは何の役にも立たなく経済活動もしないが、唯一人間の心を癒すものであるとしている。そして、平面計画的においても礼拝堂の 3 方を居室で囲み、外部からの音も遮断しているのが良い。1階の牧師住居部分アプローチの床仕上げが黒色の仕上げであり、玄関前の植え込みが黒竹であり双方共に沈黙を意味しているのも、デザインポリシーの統一性を感じた。

「風の教会」

アプローチの長いスロープに沿って水盤が設けてある。玄関からロビーの天井に水盤の光が反射してゆらゆらと揺らいでいて、ノアの箱船の中はこの様なものだったのだろうか。聖堂の中は柔らかな曲線の天井から間接光が入り、落ち着いていて気持ち良い。そこへ突然聖歌隊の方々がいらっしや、美しい聖歌を聴かせていただき、一時を安らかな気持ちで過ごさせていただいた。しかし、500 人を超える収容人数の聖堂にしてはロビーが廊下的で狭く、災害時等の避難を考えると、危険性を感じてしまう。

外観は周辺住宅に対して、高さを抑え、せつ器質タイル、小幅板等好感が持てたが、屋根の曲線が肉感的で聖なるものを感じさせなかった。又、単に曲線の問題だけではなくシングル葺の柔らかさが聖なる緊張感を失わせたのではないだろうか。

設計者が記しておられる様に「羊が牧場に休むかのように」とある曲線が、私には肉感的に見えたのだと思う。曲線の表現は本当に難しいですね。

「はつが野の家」(新人賞)

この家は、クローバーの白い花がいっぱい咲いた土手の上にある、普通性の高まった遊び心のある家であり、家庭的な雰囲気が漂った家でもある。

玄関口には大きな青、黄の色鉛筆のベンチがドンと控えていて、思わずニコツとしてしまう。鉄板で出来た細長い表札には3つの穴があいており、メッセージや花、傘等をぶら下げたりするものらしい。玄関は夏の西日を避けるため、全面壁である。通常、大棟は家の中央にあるものだが、7:3に振ったところが面白い。玄関を入ると、いきなり中庭に面しておりインテリアは明るく気持ち良い。この中庭を通してキッチンが中央にあり左に居間、右に食堂があり、それに続いてフリースペースがある。そして夏の高温に対処するために、西面には納戸と風呂としているのがうまい。

2階に上がると、やはり西面はウォーキングクローゼットとしている。そして何より広く明るいバルコニーは洗濯物が外部から見えないよう、高い壁に囲われ、夏はパンツ1枚でサンデッキのアサガオでも見ながらビールを呑むのもいいだろう。

「州見台の家」

建築家新人賞という若い人の登竜門としての賞であるのに、この家は一見して老巧な建築家の作品として見えた。陰翳礼讃を表現しようとする哲学的な雰囲気を持った深みのある家である。

5つの中庭を各部屋の間合いとしてうまく配置し、それぞれの室に景色と光と風を与えていてうまい。周辺近隣の見たくない景色を外壁に窓を設けず壁を主体にした外観とし、玄関のアプローチの前庭は禅宗の石庭を思わず枯山水風の庭がうまい。

ただ、居間正面に裸階段を持ってきたことにより哲学が崩れたが、全体として中々うまいと思った。現地審査では、施主が海外出張で室内が見られなかった点が残念であった。

「Dig In the Sky」

最初の書類審査の時点で大変興味を持った。室と室とは中庭を貫くチューブ状の廊下や階段で繋がれており、空間構成はとても面白く現地審査が楽しみであった。

しかし、行ってみてコンセプトが先行しすぎて居住性が確保されていないと思えた。

例えば、扉を設けず室同士をチューブで繋ぐことで迷路的面白さはあるが、冷暖房の問題や夫婦寝室のプライバシーに問題があり、プランを見ても扉を追加出来るようになっていない。又、踊り場にベッドが置いてある感じでせせこましくドライで、とても夫婦の寝室とは思えない。

そして、収納スペースがほとんどないのも問題である。将来、子供が大きくなって物が増えていくとどうするのかと思った。

Digとは「掘る」という意味だが、Digという言葉を使うから穴が空いただけのドライでつまらない中庭になっているのだろう。中庭とは癒しの場であるはずだが、井戸的空間を通してガルバリウムの壁が見えるだけで、緑もなく全く癒しのないつまらない空間である。

この計画は予算と敷地がもう少しあれば面白かっただろう。階段に費用と面積を取られて居室が圧迫されてプアーになった様に思えた。

「建築は常識の塊である」と言う。それを踏まえて設計すれば、君はもっと上手くなるだろう。

魚谷繁礼氏の「西都教会」は車の往来の激しい道に直接面している。しかもそこに面して大きな開口をとりエントランスとしている。にもかかわらず、内部に静謐な空間を抱え込むことに成功している。聖なる空間を確保するのに、決して恵まれた立地とは言えない。しかも面積にも、おそらくはコストにも、ゆとりはない。おそらくはぎりぎりである。仕上げも決して贅沢な素材が用いられているわけでもない。しかし美しく静謐で懐かしい空間がそこにあった。

その秘訣は二重の入れ子構造となった空間にある。さらには決して開口を見せない、光の導入方法を見せない、空間処理の巧みさにある。

空間構造は以下の通り。まず住まいやらレセプションやら打ち合わせやらの空間がコの字型に中心となる空間を囲い込み、それを純白の方形の天井が覆っている。天井はさながら宙に浮いているという格好だ。その隙間がいずこからともなく忍び込む光を内部に導いて、宙に浮く方形の純白に柔らかな陰影を与えている。

全体的には、すみずみまで隙のないデザイン、とは全く異なる。むしろ隙だらけ、あるいは突っ込みどころだらけだと言っていい。しかしそれは意図的に挿入された人間の弱さであり暖かみであって、そのすべてがていねいに、実にていねいに、処理されているのである。これはもはやデザインの巧拙ではなく、人間の心構えの問題であり、誠意の問題であり、壊れやすい心の扱いの問題である。いわばすみずみまで心をこめて展開されるデザインに、静かに心が満たされてゆくのである。佳品である。

堀部直子氏の「はつが野の家」は郊外分譲住宅地に立つ住宅の設計にあたって注目すべき解法を提示している。ともすれば醜いシャッター付きアルミサッシの開口部が無作為かつ無分別に並ぶ饒舌な風景の構成要素となってしまうがちな郊外戸建て住宅である。そこに凜とした佇まいで純白の壁が立ち上がるシンプルな家型の住まいが現れた。微妙に中心をずらした家型は因襲的な表情からも無縁である。その限られた開口部はすべてが明快な意味と意図を持ち、注意深く穿たれて、周囲の散漫な風景を引き締めている。

たとえば道路に面する壁面はきちんとファサード(正面)として扱われ、塀を設けずただゆるやかな緑の斜面に階段が配されたアプローチは、自転車止めやベンチとも相俟って、なにかしら楽しい出来事を待つような劇場性を持つ小さな広場だ。玄関の開口部を開け放せば中庭を介して奥の白いキッチンまで見通せ、一枚の扉で重層する奥性を垣間見せたり遮断できたりもする、秀逸な計画である。

隣接家屋の接近する南側はあえて遮蔽されている。ところが内部に入ればそこは大きく空に向かって開かれたテラスとなっており、中庭に適切に光が取り込まれ、家全体を明るく解放された空間とする装置となっていることがわかる。内と外のこの対比はプライバシーを守り、洗濯物などで周囲の景観を崩すこともない、しかも驚きと喜びを与える知的な解決である。しかもキッチンから隣接建物の隙間を通して遠くの山々を望みうる位置に、実に慎重に一つ、開口が穿たれているのに気づく。

やがて隣接して住宅が建つであろう北面にも乱雑な開口を設けず、内部からはリビング吹き抜け上部に開いた空を眺める窓が一つ配されて、さながら美しい絵画をみるような立面が形成されている。内部は水平的にも立体的にも回遊型の動線が確保され、きわめてぎりぎりのスケールの中で広がりを生み出す工夫がなされている。とりわけ子供たちを中心とする生活空間は楽しげであり、これは建築主の明快な思想に設計者が的確に呼応した結果とみてよいだろう。

審査員 竹山 聖

魚谷繁礼氏の「西都教会」は、方形屋根を思い切って1スパンで飛ばし、外周壁の最上部を巡る水平のスリットから礼拝堂にこぼれ落ちる光をデザインしている。礼拝室の空間が固くなり過ぎないようにと、見上げの天井伏は線対称を避けて注意深く平面と芯をズラして配置されている。牧師館が礼拝堂をコの字型に囲む巧みな構成は牧師さんの発案だとのことだが、実にそれが教会全体に奥行きを与え、光を遊ばせる間合いを許すとともに、正面の戸を開け放った際には交通量の多い西大路通との間の適度なバッファーとして機能している。建築は、華やかでも、饒舌でもない。ディテールは必ずしも巧みではないかもしれない。それでも心を動かすのは、宗教も含めた社会やコミュニティのあり方と建築の佇まいが設計という行為を通してしっかりと結びついていると感じられるからに他ならない。

堀部直子氏の「はつが野の家」は清々しい住宅だった。平面は一言で言えば、ただ容れ子状になった大小ふたつの正方形が中心をズラしてレイアウトされているのみである。つまり小さな家型の外形ヴォリュームからさらに小さな中庭のヴォイドを抜くことだけで、様々な豊かな生活スペースが過不足なく納まっている。図面を見れば、それは厳しい寸法の押さえ方にも現れている。外観の印象に反して、内部は必ずしも閉鎖的ではない。単純な中庭ではなく、2階南側に外部から家型と見せたヴォリュームの中にベランダを抱き込んで空への抜けを確保しているからだろう。台所に立つと、中庭、玄関、アプローチと、内～外～内～外が連続してゆく。ていねいな設計である。また塀を立てず、既存の法面をセットバックさせただけの駐車スペースが小さな公開空地として機能していることは、中庭型住居でありながら周辺環境への積極的な参加の意思を感じさせる。さらに将来北側の空地まで建て詰まった時には、きっと街並に対して有効なポケットパークとなるだろう。

「西都教会」と「はつが野の家」はともに、そこに見え隠れする職能としての誠実さと同時に素直さが、新人賞に相応しいと私には感じられた。今回現地審査に進んだ5作品はいずれもが相当高いレベルにあった。したがって選に漏れた他3作品にも入賞の可能性はあったと思う。ただし規定で受賞は最大2作品までとある。惜しかったのはアルファビルの「Dig In the Sky」である。空間の体験として面白く、狭い床面積の中で三角のヴォイドを内部空間に繰り込むことには成功している。だが、納まりが構成に追いつかなかったようだ。同じく施工がいかにも苦しい。いずれも設計者として予見できたことではないだろうか。「州見台の家」は書類審査の時よりも実物に好感が持てた。ただ、外部はやや大味なところもあり、細やかに配置された坪庭空間のインテリアへの取り込みがテーマのひとつであっただけに、何としても内部を見たかった。「風の教会」も隅々までとても丁寧に設計されていた。しかし矩計図に現れるポシェの扱いに象徴的に見られるように、躯体と仕上げの関係に最後まで過剰感が残った。それが近代建築だと言ってしまえばそうなのだろう。

審査員 宮本佳明